



研究論文

文学作品が描く「移動する子ども」の アイデンティティ模索と構築の諸相

『紙の動物園』を事例とした試論

小幡 佳菜絵 *

要旨

本稿は、『紙の動物園 (*The Paper Menagerie*)』(リュウ, 2015/2017) を事例として、「移動する子ども」学と文学研究の架橋を試みる学際的な試論である。本稿では、先行研究から抽出された「移動する子ども」のアイデンティティをめぐる3つの鍵概念、すなわち「名付けと名乗りの弁証法的営為」「自伝的記憶」「浮遊感」を分析枠組みとして措定する。これを基に本作品の主要キャラクターである「老虎 Laohu」のもつ象徴性を焦点化し、本作品が描く親子2世代にわたる「移動する子ども」のアイデンティティの模索と構築の諸相に迫る。この分析を通じた本研究の意義として、(1) 従来各論として論じられる傾向のあった3つの鍵概念を、分析枠組みとして統合して分析事例とともに示した理論的意義、(2) 書評や作家へのインタビューという従来の研究方法に加えて、文学作品のもつ象徴性を主題化して分析を試みた方法論的意義、及び(3) 文学作品のもつ象徴性を「移動する子ども」の教育実践に応用する教育学的な可能性を指摘した社会的意義を、本稿では主張する。

キーワード

- 「移動する子ども」,
- アイデンティティ,
- 名付けと名乗りの弁証法的営為,
- 自伝的記憶,
- 浮遊感

© 2025. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

1. 「移動する子ども」学と『紙の動物園』という短篇

本稿は、ケン・リュウ (1976～) による短篇『紙の動物園』(原題: *The Paper Menagerie*) を「移動する子ども」学の文脈に位置付け、本作品が描写する越境性を特徴とする人々がアイデン

* 北京大学 (E メール: xfjch19@tsinghua.org.cn)

ティティを模索し構築していく様相について、考察することを目的とする。そのため本稿は、「移動する子ども」学と文学研究の架橋を試みる、ひとつの学際的な試論として捉えることができるだろう。なぜなら、「SF」や「幻想文学」として概して評価されるこの作品を、「移動する子ども」という経験と記憶のありようを描く作品として位置付け、その学術的な貢献や意義について検討する試みだからである。

「移動する子ども」とは、「幼少期より複数言語環境で成長したという経験と記憶」（川上, 2021, p. 5）を中心に構成される、分析概念のことを指す。川上（2021）によれば、このような経験と記憶は、主に次の2つの軸から捉えることができる。それは、「今、ここ」という共時性に力点を置く「日常的移動の横軸」と、「あの時そしてこれから」という通時的な眼差しから紡がれる「個人史的移動の縦軸」である（p. 5）。同時に、この分析概念は、「空間」「言語間」「言語教育カテゴリー間」という3種類の「移動経験の貯蔵庫」を内包する（p. 5）。このような「移動する子ども」という分析概念に根ざす「移動する子ども」学は、「移動」と「ことば」という「バイフォーカル (bifocal) な視点」に基づき、「移動性、複文化性、複言語性」に特徴付けられる人たちの生の諸相を考察する学問である（p. 6）。

『紙の動物園』は、1976年に中国甘粛省蘭州で生まれ、幼少期に米国へと移住したケン・リュウ (Ken Liu; 刘宇昆) によって、2011年に英語で発表された。ヒューゴー賞、ネビュラ賞、世界幻想文学大賞という「英語圏のSFおよびファンタジー関係のメジャーな三大賞」（古沢, 2017, p. 257）の各短篇部門を同時に受賞した、史上初の作品である。川上（2022）は、「幼少期より複数言語環境で成長した経験と移動の記憶を持つ作家」（p. 219）の代表的な人物のひとりとして、ケン・リュウを挙げている。

上述のように世界的に卓越した評価を得る本作品の梗概は、次のとおりである。語り手であり主人公でもあるジャックは、中国にルーツをもつ母親と（おそらく）米国にルーツをもつ父親のもと、米国のコネチカットで生まれた。ジャックの幼少期、便宜上個別命名言語名を使用するならば、母親とジャックの間では主に中国語が使用され、それ以外は主に英語が家庭内で使用されていた¹。ジャックの母親は、彼の生まれ年の干支にちなんで、収集しているクリスマス・ギフトの包

1 本作品では具体的な描写は限定的ではあるものの、例えば、親子3人が集まる場面など、特にジャックの幼少期における家庭内での発話は、「トランスランゲージング (translanguaging)」（García & Li Wei, 2014）によって、流動性を帯びながら実践されていた可能性がある。これは、アクセス可能なすべての言語資源を「言語の境界線を超越した」（加納, 2016, p. 1）ひとつのレパートリーの総体として捉える概念である。

装紙を素材に、息子のために紙の虎を手づくりする。そしてジャックは愛着を込めて、この紙の虎を「老虎 Laohu」と呼ぶ。そのほかにも、ジャックの願いに応じて、山羊や鹿、水牛や鯨などの動物たちを母親は折り、動物たちに「魔法」で息=生命を吹き込んでいた。それほど、ジャックと母親の関係は良好であるかのように思われた。

しかし、成長とともに友人や隣人など家庭外の社会との接点が増えるにつれて、ジャックは次第に軽蔑の眼差しとともに母親との交流を避けるようになる。この背景には、米国における英語のモノリンガル規範をはじめとする、社会規範との接触やそれらの内面化が少なからず影響していたと思われる。果たして、青年期に入ったジャックは、このような親子間の行き違いや衝突に加え、母親のライフストーリーやミックス・ルーツである自身の来歴をどのように受けとめ、アイデンティティをどのように模索し構築していくのか。また、その営みは紙の動物たちを媒介として、どのような方向に進展していくのか。これらの主題を骨格として、この作品の物語世界は展開していく。

本稿の構成は以下のとおりである。2章では、まず「移動する子ども」学における先行研究を紐解き、この学問における文学作品のこれまでの受容について確認する。そのうえで、「移動する子ども」学におけるアイデンティティを主題とした研究の系譜を基に、アイデンティティの模索や構築を特徴付ける、3つの側面を本稿の鍵概念として抽出する。その鍵概念とはすなわち、(i)「名付けと名乗りの弁証法的営為」(川上, 2021, pp. 69-88; 小幡, 小澤, 2024), (ii)「自伝的記憶」(佐藤ほか, 2008; 川上, 2021, pp. 205-230; 小幡, 2024), (iii)越境的な存在であるがゆえに経験する「浮遊感」(川上, 2021, pp. 179-204; 川上, 2022)である。そして、この3つの鍵概念を分析枠組みとして本稿の研究課題を設定する。続く3章では研究課題に沿って、『紙の動物園』が描きだす「移動する子ども」のアイデンティティの模索と構築の様相を、物語世界の展開とともに検討する。その際、「老虎」の帯びる象徴性に特に注目し、ジャックと母親という2世代にわたる「移動する家族」(川上, 2018b)のアイデンティティをめぐる再帰的な営みについて探究する。これらの検討をふまえたうえで、4章では、「移動する子ども」学と文学研究の架橋を試みる本稿のもつ、「移動する子ども」学への学術的な意義や貢献の可能性について議論する。

2. 先行研究と研究課題

本章ではまず、文学作品の受容に関する「移動する子ども」学の先行研究を紐解く(2.1節)。次に「移動する子ども」学における、アイデンティティをめぐる先行研究の系譜に目を向け、アイデンティティの模索や構築の諸相を考察するための鍵概念を、本稿の分析の手立てとして措定する(2.2節)。最後に、これらの先行研究の検討をふまえて、本稿の研究課題を提示する(2.3節)。

2.1. 「移動する子ども」学における文学作品の受容

「移動する子ども」学では、これまで主に4名の文学作家の作品が論じられてきた。その作家とは、一青妙(川上, 2012, 2021), 温又柔(川上, 2016, 2017, 2021), 岩城けい(川上, 2018b, 2020, 2021, 2024), 荻野アンナ(川上, 2022)である。その多くが書評と作家へのインタビューという形式をとる, これら一連の研究には主に次の2つの動向がみてとれる。

第一に, 「自己エスノグラフィー」(川上, 2021)として作品を解釈する視座である。例えば, 川上(2021)では, 『私の箱子』(一青, 2012)や『台湾生まれ 日本語育ち』(温, 2015)などの自伝的エッセイが, 「移動する子ども」学において「学術的価値」(川上, 2012, p. 127)のある, 自己エスノグラフィー的作品の代表的な事例として挙げられている。

第二に, 小説作品の「移動する子ども」学への学術的価値の主たる源泉は, 作家自身の「モバイル・ライブズ」(エリオット, アーリ, 2010/2016; 川上, 2021, p. 156)の経験と記憶にある, という見立てである。「モバイル・ライブズ」とは, 人びとの生活が「移動の途上」(エリオット, アーリ, 2016, p. i)にある状態, つまり, 移動が「常態」(川上, 2018a, p. 5)である日常生活の様相を指す。さらに, 「移動する子ども」学の指摘によれば, ここで主題化される「移動」には, 「空間」「言語間」「言語教育カテゴリー間」(川上, 2021, p. 5)など, 多層的な「移動」が内包される。この点は, 本稿1章でも述べたとおりである。このような「モバイル・ライブズ」の観点から, 川上(2024)は, 岩城けいによる作品群(2017a, 2017b, 2018, 2023)の「アカデミックな研究」としての意義を次の3つの観点から論じている。

- (1) 著者がモバイル・ライブズの中で創作活動をしている点
- (2) 「移動とことば」のバイフォーカルな軸で, つまり移動と移動にともなう複数言語環境で生活する物語世界を描いている点
- (3) 「移動とことば」を特徴とするモバイル・ライブズに生きる人々の思い, 葛藤, 情念, 不

安, 希望など主観的な意味世界と, 人としての生き方とアイデンティティを描いている点

(川上, 2024, p. 95)

また, 川上 (2022) は, 本稿で中心的に論じる『紙の動物園』の人物設定や物語構成について, 「作者ケン・リュウの経験や記憶, 想像力・創造力が関係していると考えられるだろう」(p. 221) と評している。この指摘からは, 本作品と上述の3つの意義との関連性が示唆される。しかし, 川上 (2022) 及びこれまでの「移動する子ども」学の研究を見渡すかぎり, 本作品の物語世界の内実に則した「アカデミックな研究」としての詳細な検討は, いまだ限定的であるように思われる。岩城けいの作品群にとどまらず, 『紙の動物園』においても, 学術的な貢献の可能性が開かれている以上, 本作品を「移動する子ども」学の文脈に位置付けたうえで, より詳細な検討に臨むことには学術的な意義があるように思われる。本稿では, 川上 (2024) が整理する上述の3つの観点のうち, (3) で指摘されている, モバイル・ライブズ, そして, 越境的な生を生きる人たちの主観的な意味世界や生とアイデンティティの諸相について中心的に検討する。

2. 2. 「移動する子ども」学におけるアイデンティティ研究と鍵概念

本稿の主題である「アイデンティティ」とは, そもそもどのように理解できるものなのだろうか。これまで「アイデンティティとことば」に関する研究テーマは, 社会言語学や応用言語学, ディスコース研究などの分野を中心に, 学際的に広く議論されてきた (Labov, 1972; Gumperz, 1982; Eckert, 1989; Butler, 1990; Bourdieu, 1991; Eckert & McConnell-Ginet, 1992; Norton-Peirce, 1995; Bucholtz, 1999; Silverstein, 2003; Joseph, 2004; Blommaert, 2005, pp. 203-232; Bucholtz & Hall, 2005; De Fina et al., 2006; Agha, 2007; Block, 2007; Coupland, 2007; Dong, 2011; Norton, 2013; De Fina, 2016; 川上ほか, 2018; 川上, 2021; 川上ほか, 2022)。

例えば Dong (2011) は, 昨今の社会言語学及びディスコース研究における「アイデンティティとことば」の理解と研究動向を, 次の3点に整理している。第一に, アイデンティティは, 「所有 (possess)」(p. 4) されるものとして本質主義的に捉えられるものではない, という理解である。この捉え方にかえて昨今では, 社会的実践のなかで構築され (constructed), 交渉され (negotiated), 遂行される (enacted) ものとして理解される傾向がある。第二に, アイデンティティの複数性や複雑性, 曖昧性に着目する研究動向が挙げられる。ここでは, アイデンティティはレパートリー (a repertoire of identities) として捉えられている (p. 5)。つまり, 相互作用の各場面に応じ

て、個人の人生の軌跡を反映した資源（例：言語資本）の活用によって、アイデンティティは動的に構築されるという理解である。第三に、アイデンティティの構築という動的で不断の営みは自己だけで完結するものではない、という理解である。ここでは、アイデンティティの構築には他者の眼差しや評価も関与すると考えられている。

一方、「移動する子ども」学を提唱する川上（2021）は、「アイデンティティ」を「自分が思うことと他者が思うことによって形成される意識」（p. 3）と定義している。この捉え方は、Dong（2011）の指摘する「アイデンティティ」理解の潮流とも概ね整合する。「移動する子ども」学の文脈に位置付けられる本研究では、川上（2021）のアイデンティティ理解を基点として、この学問におけるアイデンティティに関する先行研究の系譜に目を向ける。そして、これらの検討をふまえて、『紙の動物園』が提示するアイデンティティの表象や象徴性を分析するための鍵概念の措定を試みる。本稿における分析の手立てとなる鍵概念は、次の3点に整理できる。

第一に、「名付けと名乗りの弁証法的営為」としてのアイデンティティ構築の動的様相である（川上, 2021, pp. 69-88; 小幡, 小澤, 2024）。この観点は、上述の Dong（2011）の3点目の指摘や、川上（2021）による「アイデンティティ」の定義にも色濃く反映されている。つまり、自己の眼差しと他者の眼差しが弁証法的に影響関係を築くなかで、越境的な生を生きる当事者たちの自己認識が動的に形成され続ける様相を意味する。Blommaert（2005）では、「自己の眼差し」に関わるアイデンティティの諸相は“inhabitable identity”（p. 253）、一方、「他者の眼差し」に関わるアイデンティティの側面は“ascriptive identity”（p. 251）として理解されている²。このように、自己と他者の「弁証法的営為」として捉えるアイデンティティ構築の様相は、「移動する子ども」という分析概念を構成する2軸のうち、共時性に紐づく「日常的移動の横軸」（川上, 2021, p. 5）に特に強く関係する側面と考えられる。なぜなら、このアイデンティティの側面では、同時代的に共存する自己と他者の存在が前提とされているためである。

さらに、このような「名付けと名乗りの弁証法的営為」の過程は、川上（2021, pp. 69-88）によれば、次の3つの側面から細分化して捉えることが可能である。すなわち、(i) 当事者の名乗る意識の変化や動きを意味する「動態性」、(ii) 当事者の生が埋め込まれた、権力構造やイデオロギーの影響を意味する「政治性」、そして (iii) 当事者の日常的な生活世界や経験と記憶を

2 Blommaert（2005）は、両概念を次のように定義している。前者は、“a self-constructed and self-performed identity [...] through which people claim allegiance to a group”（p. 253）を意味し、他方、後者は、“an identity attributed to someone by others [...] and including that someone in a socially defined category”（p. 251）を意味する。

構成する、社会的環境及び関係性を意味する「社会性」という3点である。これらの側面は例えば、米国と日本を中心にトランスナショナルに生きる在米高校生たちのアイデンティティ構築の様相を研究した小林(2021)においても、共通して観察される特徴的な側面である(小幡, 小澤, 2024)。

次に、「移動する子ども」のアイデンティティ研究を担う第二の鍵概念として、「自伝的記憶」が挙げられる(佐藤ほか, 2008; 川上, 2021, pp. 205-230; 小幡, 2024)。これは、「過去の自己に関わる記憶の総体」(佐藤ほか, 2008, p. i)のことを主に意味するが、同時に、このような過去に紐づく自己概念を基点として「未来の自分」を計画し予測する「展望的記憶」をも含む概念である(太田, 2008, p. 209)。このように理解される「自伝的記憶」は、当事者の人生に統合をもたらすことを志向する「自己物語」(信原, 2017)や、「一貫した、しかし絶えず修正される来歴のナラティブ」(ギデンズ, 2021, p. 16)を紡ぐうえで、重要な役割を果たすと考えられる。また、川上(2023)は、「自己物語」を紡ぐ過程における「情動」という身体性の関与や影響も、「移動する子ども」の研究に際して必要な観点であると指摘している。

ここで、「移動する子ども」の主要な2軸に改めて目を向けるならば、「自伝的記憶」は、通時的眼差しである「個人史的移動の縦軸」に特に強く関連しているといえるだろう。ギデンズ(2021)は、自己アイデンティティを「個人が自分の来歴に基づいて再帰的に理解する自己」(p. 403)と定義しており、このことから「自伝的記憶」が「移動する子ども」のアイデンティティの模索や構築に与える影響は大きいと考えられる。また、「移動する子ども」学のアイデンティティをめぐる研究の多くが(川上, 2021, pp. 179-204, 205-230; 太田, 2022), ライフストーリー研究法をその方法論的基盤としていることも、この見立てを裏付ける証左のひとつといえる。

最後に、「浮遊感」(川上, 2021, pp. 179-204; 川上, 2022)が挙げられる。これは、「移動」に伴い、複文化・複言語環境で成長したという越境的な存在であるがゆえの、揺らぎのある心象風景と考えられる。バーバ(2012)の表現を借りるならば、「越境する生」「境界線上の生」(p. 1)や「異種混淆の場」(p. 44)を生きるがゆえの、「宙吊り」の感覚(p. 23)と理解できるかもしれない。また、川上(2021)で提示される、ドイツと日本にルーツをもつシュミット誠さん(仮名)の隠喩を参照するならば、「海の中に浮いている感じ」(p. 194)という、特定の文化的・言語的な環境に十全的に溶け込みきれない距離感や微妙な関係性をも包摂しうる。「浮遊感」は、これらの情感を詩的に掬いとった表現として理解できるものかもしれない。

同時に、浮遊感の現れには、アイデンティティの模索や構築という営みにおいて、当事者の自由

意思の埒外で自己認識に揺らぎをもたらす他者の存在や、記憶が必ずしも確かなものではないという曖昧性や不定性も影響している可能性がある。その意味で、第三の鍵概念である「浮遊感」は、「名付けと名乗りの弁証法的営為」と「自伝的記憶」の両者が、当事者の身体で邂逅して交錯するなかで、かれらにもたらされる揺らぎを伴う心の質感の総体として理解できるものといえるだろう。

本節では、「自分が思うことと他者が思うことによって形成される意識」(川上, 2021, p. 3), つまり、自己の眼差しと他者の眼差しによって動的に構築される「再帰的な意識」(ギデンズ, 2021, p. 90)として「アイデンティティ」を理解した。そして、それらが絶えず交渉される営みを特徴付ける3つの側面を本稿の鍵概念として系譜学的に考察し、その措定を試みた。2. 3節では、3章で中心的に議論する研究課題を提示する。続く3章では、これらの研究課題に沿って『紙の動物園』が描く「移動する子ども」のアイデンティティの諸相について具体的に検討する。

2. 3. 本稿の研究課題

本稿では、『紙の動物園』における語り手であり主人公であるジャック、そして中心的な登場人物である母親に加え、主要なキャラクターと考えられる「老虎」の象徴性に特に注目する。そのうえで、次の3点の研究課題(RQ)を設定した。これらの研究課題は、前節で整理した「移動する子ども」学におけるアイデンティティ研究の系譜が示唆する、3つの鍵概念にそれぞれ対応している。

- (1) 「老虎」の存在や振る舞いは、ジャックと母親を取り巻く「名付けと名乗りの弁証法的営為」をどのように象徴していると解釈できるか (RQ1)
- (2) 「老虎」の存在や振る舞いは、ジャックと母親の「自伝的記憶」をどのように象徴していると解釈できるか (RQ2)
- (3) 総じて、本作品では、「移動する子ども」という経験と記憶に関する「浮遊感」はどのように表現されているのか。また、「老虎」の存在や振る舞いは、「移動する子ども」に伴う「浮遊感」をどのように象徴していると解釈できるか (RQ3)

3章では、これらの研究課題にそれぞれ対応するかたちで節立てを構成し、「移動する子ども」におけるアイデンティティの模索と構築の諸相に関する各論点について、『紙の動物園』の描く物語世界の内実とともに具体的に検討する。

3. 『紙の動物園』におけるアイデンティティ表象

RQ に関する各論に入る前に、「老虎 Laohu」という主要キャラクターについて改めて設定を確認しておきたい。老虎は、主人公であるジャックの母親が、彼の幼少期に息子のために折った「紙の動物」である。母親の「命」と「魔法」(リュウ, 2017, p. 10) を介してこれらに息=生命が吹き込まれるという設定に、本作品が「SF」や「幻想文学」として配架される主な理由があると思われる。それでは、このように作品に幻想性をもたらす老虎は、「移動する子ども」のアイデンティティの諸相をめぐって、具体的に何を象徴しているのだろうか。以下では、この点を主に検討していきたい。

3. 1. 老虎の象徴性と「名付けと名乗りの弁証法的営為」(RQ1)

RQ1を検討するにあたって、老虎とジャックの来歴の重なりや重層性にまずは着目したい。老虎の成り立ちは、以下にみるように、米国と中国の双方にルーツをもつ、ジャックの越境的な生のありようと共鳴する部分が多い。なお、以下の本作品からの引用に際しては、頁数のみを記載する。

小さな紙の虎がテーブルの上に立っていた。拳をふたつ並べたくらいの大きさだ。

虎の皮は包装紙の模様がついていて、白地に赤い棒飴と緑色のクリスマスツリーが描かれていた。(p. 10)

この描写からは、老虎とジャックがともに米国にルーツをもつという共通点を感じとることができる。クリスマスという米国で重要視される文化的な慣習が、老虎の物質的な側面に確かに刻印されているためだ。続いて、以下の抜粋を検討したい。これは、物語の後半で明かされる、ジャックの母親が自身のライフストーリーを記した手紙からの抜粋である。

母さんは一九五七年に河北省シグル村で生まれました。(中略)村は折り紙で有名

で、母が紙の動物をこしらえて、命を吹きこむやり方を教えてくれました。(p. 28)

この抜粋からは、老虎の物質性をなす折り紙の起源が、ジャックの母親のルーツである中国の村の慣習に辿れることが示されている。つまり、老虎はその起源が干支という中国の慣習に由来することに加え、折り紙という物質的な側面からも、母親の人生の軌跡や、彼女のルーツである中国との繋がりを象徴するキャラクターなのである。以上から、クリスマス・ギフトの包装紙で折られた、「紙の動物」としての老虎の物質的な側面や、さらに敷衍して、その物語世界におけるキャラクターとしての位置付け及びその存在は、米国と中国というジャックのルーツ及びその存在

と、重なりをもつものとして表象されていると考えられる。

老虎とジャックの重層的な描写に関する以上の検討をふまえたうえで、RQ1を検討したい。このRQは、「名付けと名乗りの弁証法的営為」をめぐる老虎の象徴性を問うものである。老虎の混淆的な物質性に象徴されるように、ジャックは、米国と中国という双方の空間を物理的、文化的、心理的側面において多層的に越境していることが示唆される。換言するならば、それは、ジャックが「境界線上の生」(バーバ, 2012, p. 1)や「中間地点」(p. 2)を生きていることを意味する。このような越境的な生のなかでジャックが経験する「名付けと名乗りの弁証法的営為」の内実は、老虎をめぐる以下の抜粋に、典型的に象徴されているように思われる。

また、老虎は、裏庭でぼくと遊んでいるとき、スズメに飛びかかるのが好きだった。だけど、あるとき、追いつめられたスズメが必死に反撃し、老虎の耳を引き裂いた。老虎は情けない声をあげ、ぼくが抱えあげるとびくっと震え、母さんがテープで耳をつなぎ合わせてやった。それからというもの、老虎は小鳥を避けるようになった。(p. 13)

この抜粋には、「裏庭」という象徴的な空間における、老虎とスズメの闘争的な関係や情景が描かれている。ここでは「裏庭」は、家庭内と家庭外という異質性を帯びる社会の間を結ぶ「境界的な空間 (liminal space)」(バーバ, 2012, p. 6)として、象徴的に描写されているのではないだろうか。とりわけ、このような境界的な空間では、「コンタクトゾーン (the contact zones)」(Pratt, 1991)の議論に代表されるように、空間がはらむ権力構造という内在的な特徴(Massey, 1999, 2005)が、しばしば顕著に現れる。

実際、本作品の物語世界では、この描写の直後に、ジャックが10歳のときに経験した、他者の眼差し及び名付けに関する政治的で闘争的な場面が具体的に示される。それは、ジャックの自宅を訪問した近隣に住む女性たちによって、ジャックが「混血」「チビの化け物³」「シナ人ばくなくい発音」(pp. 14-15)と名指された経験や、友人のマークによって老虎が「ゴミ」「中国製のクズ」(pp. 16-17)と名指される経験であった。そして、この頃になると、老虎は「すっかりすり切れ、いたところがテープや糊で繕われていた」(p. 16)と描写されている。上述の老虎に関する抜粋とあわせ、これらの描写は、ジャックが経験した「名付けと名乗りの弁証法的営為」をめぐる政治性や闘争的な性質を示唆していると考えられる。

同時に、具体的な社会的関係性のなかで、他者の眼差しや名付けを介して「アブノーマル (ab-

3 主人公が中国の文化に繋がっているという事実を理由に、他者化や周縁化を経験したうえで疎外されるという描写は、『文字占い師』など、リュウ (2015/2017) の短篇作品において繰り返しみられる。

normal)」(Foucault, 1999/2003)として扱われ、「スティグマ (stigma)」(Goffman, 1963)とみなされる経験は、当事者の「移動する子ども」という記憶に確かな痕跡や傷痕を残す。それは、老虎の「修繕」(p. 16)や傷の修復という象徴性と結びついているように感じられる。このように名指され、名付けられた傷痕を伴う経験は、ジャックと母親のその後の関係性やジャックの自己認識、つまりジャックと老虎との関係性にも影響を与えることとなる。例えば、母親に対するジャックの振る舞いは次のように変化する。

母さんが中国語で話しかけようものなら、ぼくは返事をしなかった。しばらくして、母さんは英語をもっと使うようになった。だけど、訛りや文法間違いが聞くに堪えなかった。ぼくは訂正しようとした。やがて、母さんはぼくがそばにいるときには、まったく話さなくなった。(p. 20)

この場面でジャックは、英語を使用することを母親に強制し、「アメリカの料理」(p. 18)を要求するなど、自身に紐づく中国性を徹底的に排除し、米国性に同化的に振る舞おうとする。そして、母親を「ここにいるべきでない」(p. 18)存在として周縁化して位置付けるに至る。このように、居住している米国の文化に対して、同化的に振る舞う営みをあたかも自明視する志向性は、「誤認 (misrecognition)」(Bourdieu, 1991)の一形態として理解できるのではないだろうか。例えば、「標準的な英語」という言語変種のひとつを、「正統言語 (legitimate language)」(Bourdieu, 1991)として盲目的に位置付け、その使用を規範として信じ込み、自明視する志向性は、米国における象徴的な権力性や政治性に裏打ちされたイデオロギーに、ジャックが埋め込まれていることを示唆している。

このような「名付けと名乗り」の闘争的なポリティクスの場に埋め込まれた結果、ジャックは、スター・ウォーズの「ほんとうのおもちゃ」(p. 19)を手に入れ、老虎を「屋根裏の靴箱にしまい」込む(p. 21)ことになる。ここには、他者の眼差しを受けて、ジャックが自身の自己認識の一部を抑圧するという、「葛藤、情念、不安」(川上, 2024, p. 95)に代表される彼の主観的な意味世界が象徴されているように思われる。

3. 2. 老虎の象徴性と世代間で交錯する「自伝的記憶」(RQ2)

老虎は、ジャックと母親という2世代にわたる「移動する子ども」の「自伝的記憶」が交錯する象徴的な空間であり、物質的な媒体でもある。ジャックの視点からみるならば、物語の展開が母親の折った老虎をめぐる記憶を主軸に紡がれているという、その物語構成にこの点は如実に示

されているだろう。老虎は、「ぼくが一番古い記憶」(p. 9)であり、「自伝的記憶」の総体と呼ばれ起こす、象徴的な存在として解釈することができる。この見立ては、3. 1節の検討からも有効であると考えられる。

一方、母親の「自伝的記憶」は、老虎とどのような関わりをもって描かれているのだろうか。母親の「自伝的記憶」にとって老虎は、ジャックに宛てた手紙がその裏地に書かれていたという点で、物質性がより強調された媒体として機能しているように思われる。つまり、彼女の「声 (voice) ⁴」(Bakhtin, 1981)を開示し、解放するための具体的な媒体として位置付けられているのである。手紙=老虎という媒体は、このような主観的な意味世界から湧きあがる「声」を解放するものだった。だからこそ、ジャックの母親は、彼女自身の幼少期の経験や記憶と結び付いた中国語で「全身全霊を込めて」(p. 28)手紙を書き記す必要があったのだと考えられる。病床の母親は、息子宛ての手紙で次のように心境を吐露している。

わたしが息をするのを止めたとき、動物たちは動くのを止めるでしょう。だけど、全身全霊をこめてあなたに手紙を書いて、この紙に、この言葉に、母さんのなにがしかを残しておくつもりです。(中略)

いままで一度もあなたに母さんの人生について話したことがなかったわね。あなたが幼いときには、あなたが大きくなって、理解できるようになったら話そうとずっと考えていたの。だけど、なぜだか、その機会はけっして訪れませんでした。(p. 28)

この言葉を起点として、手紙のなかで母親の「自伝的記憶」と「声」が紡がれ始める。彼女のライフストーリーもまた、「移動」とともに構築された軌跡であった。ジャックが友人や隣人たちと「名付けと名乗り」をめぐる衝突を経験した、同じ10歳という年齢で母親は「孤児になった」(p. 29)。その窮状を逃れようと、河北省から香港へと「密出国」した彼女は、陳家の「養子」となった(p. 30)。しかし、そこでの生活は過酷なものであった。

陳家がふたりの男の子の世話をさせるためにわたしを選びました。わたしは毎朝四時に起き、朝食の支度をしました。(中略)鈍くさかったり、間違いをしたりすると、叩かれました。子どもたちが悪いことをすると、叩かれました。英語を学ぼうとしているところを見つかると、叩かれました。(p. 30)

4 「声 (voice)」は、Bakhtin (1981) では、以下のように定義されている: “the speaking personality, the speaking consciousness” (p. 434)。この概念の解釈については、例えば Wertsch (1993) などで詳細に検討されている。

このような抑圧的な生活に耐えて6年後、ジャックの母親はさらなる「移動」を試みる。それは、この過酷な生活から脱出する手段としての、また、「ただひとつだけある希望」(p. 31)としての米国人との結婚であった。こうして、彼女はコネチカットに移住し、慣れない現地の生活のなかでジャックを出産することとなる。

老虎は、このように、仲介者として母親の「声」をジャックに届けた。この「声」は、ジャックの身体に浸透し「皮膚を通り、骨を通して、心臓をぎゅっと」(p. 27)つかみ、ジャックの情動を揺さぶる。この一連の場面から感じとれるのは、強さと弱さが両義的に共存する老虎の象徴性だろう。老虎は、一方では、ジャックの両義性を象徴していると解釈できる。それは、一側面では「紙老虎（一見強そうにみえるが、実際には弱く脆いことの比喩）」という中国語の慣用表現が意味するように、母親に対して「英語を話せば!」と威勢よく怒鳴るなど、ジャックの見かけ上の強さを示している。同時にジャックは、病床に伏す母親と主体的に和解することをためらう、繊細な心の持ち主でもある。

さらに、母親のほうに目を移してみたい。作者のケン・リュウによれば、『紙の動物園』という題名には、テネシー・ウィリアムズ (1945/1988) の戯曲『ガラスの動物園』(原題: *The Glass Menagerie*) と共通する主題が含意として込められている。

この短篇の題名は、まさしく、ウィリアムズの戯曲へのアリュージョンです。短篇のなかでもっぱら弱々しく、脆い存在であると見られていた母親が、折り紙の動物と同様、大きな内なる力を持っていることが明らかになるのですから。(古沢, 2017, pp. 259-260)

ここで指摘される母親の「内なる力」は、例えば、彼女の英語との関わりから感じとれるのではないだろうか。ジャックの母親の「自伝的記憶」において、英語を学ぶということは、体罰という物理的な制裁を受け、身体的かつ精神的な傷を負うリスクのある行為であった。それにもかかわらず、彼女は英語が正統言語として力をもつ米国に移住することを決めた。その選択は、当時の窮状から解放される唯一の方法であったとしても、勇気を要するものだったに違いない。

また、ジャックから英語を話すことを要求されて以降、「通訳」(p. 12)を介することなく「ずいぶんましな」(p. 21)水準になるまでに、多くの苦労を克服してきたであろうことは想像に難くない。英語との関わりについて、トラウマともいえる記憶を抱える彼女にとって、ジャックという正統言語の審問官的な存在からみて「ましな」水準になるほど、英語と対峙し続ける営みには精神的な負担も多く課されたことだろう。このように、強くもあり弱くもあるという人間の両義的な性格を描く

「自伝的記憶」のリアリティは、合理性を追究する文体とは異なる、独自の幻想的表現力を有する本作品の物語世界だからこそ、深みをもって生成できるものといえるだろう。

3. 3. 老虎の象徴性と「浮遊感」(RQ3)

「移動する子ども」という経験と記憶とともに生きる人たちの感じとる「浮遊感」は、その越境的な生の特質ゆえに生じると考えられる。多層的な「移動」に特徴付けられる越境的な存在の日常は、複文化性や複言語性によってかたちづくられる。だからこそ、その当事者はかれらを取り巻く社会的、文化的な規範やそれに伴う恣意性に対する「自然的態度」(ギデンズ, 2021, p. 65)を、ときに懐疑的な構えのもと留保する契機をより多く経験するのではないだろうか。なぜなら、「移動」には、言語の指標性に影響を与える社会言語学的スケール (sociolinguistic scales) (Blommaert, 2005, 2007, 2010) や、言語の価値や階層性に関する独自のロジックを有する言語市場 (Bourdieu, 1991) など、権力構造や規範及び政治的システムに関わる「移動」も伴うためである。

「自然的態度」とは、ギデンズ (2021) によれば、日常の行為や言説に従事するために、「自明視しなければならない自分や他者、対象-世界に関する疑問を括弧に入れる」(p. 66) 態勢のことを指す。この「自然的態度」に対して留保の姿勢をとるとき、つまり、日常的な生活世界に対して懐疑的な眼差しが向けられるとき、果たして当事者には何が起こるのだろうか。ギデンズは次のように述べる。

日々の行為や言説の瑣末に見えるものの裏側には、混沌が潜んでいる。しかも、この混沌は単なる無秩序ではない。事物や他者についての現実感そのものの喪失である。
(ギデンズ, 2021, p. 65)

「移動」に伴い、複文化や複言語に触れることが常態である人たちの場合、文化や言語に関わる異なる規範が、日常生活のなかで拮抗しながら当事者に同時に働きかけてくる。つまり、規範の「多中心性 (polycentricity)」(Blommaert, 2005, 2010) を、日々の生活のなかでより敏感に感じとっていると考えられる。このような日常生活のありようが、特定の文化や言語の規範に対する「自然的態度」への懐疑的な眼差しをときに促すからこそ、生活世界に潜む「混沌」に触れ、「現実感そのものの喪失」(ギデンズ, 2021, p. 65)、つまり「浮遊感」を経験するのではないだろうか。その結果、当事者の日常生活に現実性の揺らぎが生じるのではないかと考えられる。

例えば、ジャックの場合、米国に紐づく文化的な規範を自明視する「自然的態度」に対して、懐

疑的な眼差しを向ける契機を以下の場面で経験していたと解釈できる。これは、ともすると微細な経験に感じられるが、マークとの衝突や母親との長期にわたる行き違いの伏線へと転じる転機のひとつであったように思われる。

近所に住む男の子のひとり、マークがスター・ウォーズのアクションフィギュアを持ってやってきた。(中略) ぼくにはそのフィギュアはちっとも本物のオビ=ワンに似ていないように思えた。(p. 15)

母親の「魔法」によって、生きた紙の動物たちと日常的に接するジャックにおいては、当時の子どもたちのあいだで人気があり、その価値が自明視されていた、スター・ウォーズのフィギュアに対する「自然的態度」が留保されていたのかもしれない。さらに、このような周囲の社会や文化に対する「自然的態度」の留保という契機は、「移動する子ども」の日常的な生活世界の自明性や現実的な性格を、宙吊りにしてしまうのかもしれない。

では、このような宙吊りの感覚や「浮遊感」と、老虎の象徴性のあいだにはどのような関わりがあるのだろうか。この問いを検討するにあたっては、老虎の帯びる越境的な性格に注目する必要があるように思われる。老虎は、ジャックや母親と同様、多層的な越境性を内包している存在である。例えば、老虎は、亡くなった母親の「声」を清明節（清明节）にジャックへと伝える仲介者の役割を担っていた。このことから、現実世界と死後の世界を越境する存在として解釈することができる。また老虎は、「母さんの息をわかちあい、母さんの命をもらって動く」(p. 10) こともあれば、空気が押し出されれば「ただの紙」(p. 17) で出来ている物質にすぎない。つまり、老虎は、魔法や想像に由来する幻想的世界と現実世界をも越境する存在であると理解できる。

人は越境を経験するとき、自分が自明視してきたことに対する「自然的態度」が揺らぎ、自分がいかに「「かのように」の環境 (an as if environment)」(ギデンズ, 2021, p. 67) で、仮構のもと生活してきたかに気付かされる。つまり、自分がいかに「誤認 (misrecognition)」(Bourdieu, 1991) のもとで生活してきたかを突きつけられるのだ。

ある社会規範や文化規範のもと、その恣意性に対する「疑問を括弧に入れ」(ギデンズ, 2021, p. 66), 「さも当然「かのように」」振る舞うこと。ジャックが就職活動中に戦略的に練った「効果的な嘘⁵」(p. 22) をつくなかで、採用されるべき理想的な人材である「かのように」演じること。また、カタログ上で母親が「十八歳で、ダンスが趣味、香港出身のため英語が堪能」(p. 11) である

5 「嘘」が、社会的に生存していくための手段として必要であると同時に、倫理的な葛藤を内包する両義的な存在であるというテーマは、『月へ』など、リュウ (2015/2017) の短篇作品に繰り返し登場する。

「かのように」虚偽的に自己呈示すること。これらは、社会のなかで、間主観的な仮構や共同幻想を志向する営みであるという点で、ともすると連続性があるものとして解釈できるのではないだろうか。本作品は、このような問いをも突きつけているように思われる。越境的な存在だからこそ敏感にならざるをえない、日常生活世界における「かのように」という仮構や、特定の社会や文化に根ざした共同幻想の息づかいが「浮遊感」をもたらす源泉のひとつなのかもしれない。

4. 「移動する子ども」学と文学作品を架橋する本稿の研究意義

本稿では、アイデンティティを「自分が思うことと他者が思うことによって形成される意識」（川上, 2021, p. 3）と理解したうえで、「移動する子ども」のアイデンティティの模索や構築の営みを取り巻く「名付けと名乗りの弁証法的営為」「自伝的記憶」「浮遊感」という3つの鍵概念を分析枠組みとして措定した（2. 2節）。本稿では、この分析枠組みのうち、「名付けと名乗りの弁証法的営為」は、「移動する子ども」を構成する主要な2つの軸の1つである「日常的移動の横軸」（川上, 2021, p. 5）に紐づく営みとして捉えた。一方、「自伝的記憶」は、「個人史的移動の縦軸」（川上, 2021, p. 5）に呼応するものとして捉えた。さらに、「浮遊感」は、「名付けと名乗りの弁証法的営為」と「自伝的記憶」の両者が交錯するなかで生成される、当事者の情動や心情の総体を詩的に感じとったものとして捉えなおした。これを受けて2. 3節では、これらの鍵概念に沿って3つのRQを設定した。そして、3章では、『紙の動物園』が描く「移動する子ども」のアイデンティティの諸相について、老虎の象徴性に注目しながら分析した。以下では、文学作品が描く「移動する子ども」のアイデンティティの諸相を主題とした本稿がもつ、「移動する子ども」学に対する学術的な意義や貢献の可能性について、3つの観点から整理する。

第一に、本稿の理論的な研究意義として、「移動する子ども」のアイデンティティの模索と構築の諸相を分析する枠組みを、文学作品を対象とした具体的な分析事例とともに提示した点が挙げられる。すなわち、本稿では、これまで先行研究で各論として論じられる傾向のあった「名付けと名乗りの弁証法的営為」「自伝的記憶」「浮遊感」という3つの鍵概念を統合し、それを分析枠組みとして採用して『紙の動物園』という作品の分析を試みた。なかでも「浮遊感」については、これまで、当事者の心象風景を示す表現としての言及にとどまり、「移動する子ども」学における理論的な検討は限定的であったと考えられる。本稿では、「移動する子ども」の経験と記憶とともに生きる当事者のアイデンティティの諸相を探究するにあたり、鍵概念として「浮遊感」に積

極的な意義を見出した。また、ギデنز (1991/2021) や Blommaert (2005, 2010) との関連性を指摘しながら検討を進めた。「移動する子ども」のアイデンティティの諸相を描いた本作品の分析においては、「浮遊感」を含むこの分析枠組みは一定の有効性を示したと考えられる。しかし、本稿で提示した枠組みが、「移動する子ども」のアイデンティティの諸相という主題を描く文学作品に、広く妥当するかどうかについては今後さらに検討が必要である。

第二に、本稿の方法論的な研究意義として、文学作品を「移動する子ども」学に位置付けたうえで、その作品がもつ象徴性を主題化して、幼少期から越境的な生を生きる人たちの主観的な意味世界を分析することを試みた点が挙げられる。2. 1節で概観したように、「移動する子ども」学におけるこれまでの文学作品の受容では、概して書評や作家へのインタビューという形式がとられてきた。これらの研究方法に加え、本稿では、『紙の動物園』という作品の主要キャラクターである老虎の象徴性を、RQとして焦点化しながらそれを読み解くことを試みた。老虎が何を象徴するのかに注目して分析を進めることで、本作品が描く「移動する子ども」の情動 (川上, 2023; 小幡, 2025) や心情、また、複文化性や複言語性を特徴とする家庭環境に現れる子どもの行為者性 (child agency) (Tuominen, 1999; Gafaranga, 2010; Fogle, 2012; Fogle & King, 2013; Revis, 2019) を探究するための有効な視点のひとつが得られたと、本稿では提案したい。

第三に、文学作品を「移動する子ども」学に位置付け、その作品の象徴性を焦点化する視座は、「移動する子ども」学の教育実践に応用できると考えられる。この点は、文学作品の象徴性のもつ教育学的な意義を訴えるという意味で、本稿の社会的な研究意義として捉えられるのではないだろうか。具体的には、作品のもつ象徴性を「移動する子ども」という経験と記憶の観点から読み解くという教育実践は、研究者や複文化・複言語環境で成長した当事者たち、そしてかれらを取り巻く人たちの「社会学的想像力」(ミルズ, 1959/2017) を、詩的な方法で喚起する可能性を秘めている。「社会学的想像力」とは、「人間と社会、個人史と歴史、自己と世界の関わり合い」を理解するための「思考力」のことを指す (ミルズ, 1959/2017)。文学作品との接点を契機に、このような想像力や思考力を働かせることは、「移動する子ども」という経験と記憶をめぐる自己省察や、歴史と個人史が交錯するありように対する洞察を、多角的に深める契機になると考えられる。

本稿には、文学研究の系譜に関する詳細な検討が限定的であるという課題が残されている。また、『紙の動物園』という卓越した作品を「移動する子ども」学に位置付けてその学術的意義を解釈するという試みも、作品の豊かさを鑑みれば課題が残るものかもしれない。例えば、アイ

デンティティの模索と構築の観点から見たとき、作品の結末は、どのように解釈できるだろうか。また、本作品におけるジャックの父親の振る舞いはどのように捉えられるだろうか。本稿に残されたこれらの研究課題を今後の研究指針として定め、本作品とともに、文学作品とその研究が拓く「移動する子ども」学の可能性の領域をさらに開拓していきたい。

文献

- 岩城けい (2017a). 『ジャパン・トリップ』角川書店.
- 岩城けい (2017b). 『Masato』集英社文庫.
- 岩城けい (2018). 『Matt』集英社.
- 岩城けい (2023). 『M』集英社.
- ウィリアムズ, T. (1988). 『ガラスの動物園』(小田島雄志, 訳) 新潮社. (Williams, T. (1945). *The Glass Menagerie*.)
- エリオット, A., アーリ, J. (2016). 『モバイル・ライヴズ——「移動」が社会を変える』(遠藤英樹, 訳) ミネルヴァ書房. (Elliott, A., & Urry, J. (2010). *Mobile lives*. Routledge.)
- 太田信夫 (2008). 自伝的記憶研究の今後に向けて. 佐藤浩一, 越智啓太, 下島裕美 (編) 『自伝的記憶の心理学』(pp. 200-214) 北大路書房.
- 太田裕子 (2022). 複言語で育ち, 複言語で子育てする「移動する子ども」の「ことばの実践」と意味——世代を超えて継承したもの, 変化したもの『ジャーナル「移動する子どもたち」——ことばの教育を創発する』13, 4-37. <http://hdl.handle.net/2065/00092765>
- 小幡佳菜絵 (2024). 「移動する子ども」と展望的 Family Language Policy——米日中をトランスナショナルに生きる女性の語りを事例に『ジャーナル「移動する子どもたち」——ことばの教育を創発する』15, 4-21. <http://hdl.handle.net/2065/0002004496>
- 小幡佳菜絵 (2025). 《自己検閲》に伴う「移動する子ども」の情動——米日間往還を経験した女性のライフストーリーを事例に『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』21, 55-67. <https://hdl.handle.net/11094/102059>
- 小幡佳菜絵, 小澤伊久美 (2024). 「移動する子ども」の名付けと名乗りの弁証法的営為——小林聡子 (2021). 『国際移動の教育言語人類学——トランスナショナルな在米「日本人」高校生のアイデンティティ』明石書店 [書評] 『ジャーナル「移動する子どもたち」——ことばの教育を創発する』15, 80-91. <http://hdl.handle.net/2065/0002004501>

- 温又柔 (2015). 『台湾生まれ 日本語育ち』白水社.
- 加納なおみ (2016). トランス・ランゲージングを考える ― 多言語使用の実態に根ざした教授法の確立のために『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』 12, 1-22. <https://hdl.handle.net/11094/62212>
- 川上郁雄 (2012). 「移動する子ども」の壮大な家族史 ― 一青妙 (著) 『私の箱子』講談社, 2012年 [書評] 『ジャーナル「移動する子どもたち」 ― ことばの教育を創発する』 3, 121-127. <http://hdl.handle.net/2065/00062899>
- 川上郁雄 (2016). 我住在日語: わたしは日本語に住んでいます。 ― 温又柔 (2016). 『台湾生まれ 日本語育ち』白水社 [書評] 『ジャーナル「移動する子どもたち」 ― ことばの教育を創発する』 7, 59-69. <http://hdl.handle.net/2065/00062900>
- 川上郁雄 (2017). 小説に昇華した「移動する子ども」という記憶 ― 温又柔 (2016). 『来福の家』白水社 (U ブックス) [書評] 『ジャーナル「移動する子どもたち」 ― ことばの教育を創発する』 8, 29-32. <http://hdl.handle.net/2065/00062902>
- 川上郁雄 (2018a). なぜ「移動とことば」なのか. 川上郁雄, 三宅和子, 岩崎典子 (編) 『移動とことば』 (pp. 1-14) くろしお出版.
- 川上郁雄 (2018b). モバイル・ライブズを生きる「移動する家族」の物語 ― 岩城けい (2017) 『Masato』集英社文庫 [書評] 『ジャーナル「移動する子どもたち」 ― ことばの教育を創発する』 9, 40-46. <http://hdl.handle.net/2065/00062903>
- 川上郁雄 (2020). 岩城けいの世界を読む ― 『ジャパン・トリップ』 (角川書店, 2017), 『Matt』 (集英社, 2018) [書評] 『ジャーナル「移動する子どもたち」 ― ことばの教育を創発する』 11, 100-113. <http://hdl.handle.net/2065/00074684>
- 川上郁雄 (2021). 『「移動する子ども」学』くろしお出版.
- 川上郁雄 (2022). 「移動する子ども」と文学. 川上郁雄, 三宅和子, 岩崎典子 (編) 『移動とことば 2』 (pp. 219-250) くろしお出版.
- 川上郁雄 (2023). 情動の視点から見る「移動する子ども」学『ジャーナル「移動する子どもたち」 ― ことばの教育を創発する』 14, 66-80. <http://hdl.handle.net/2065/0002000760>
- 川上郁雄 (2024). モバイル・ライブズの青春群像 ― 岩城けい (2023) 『M』集英社 [書評] 『ジャーナル「移動する子どもたち」 ― ことばの教育を創発する』 15, 92-97. <http://hdl.handle.net/2065/0002004502>

- 川上郁雄, 三宅和子, 岩崎典子 (編) (2018). 『移動とことば』くろしお出版.
- 川上郁雄, 三宅和子, 岩崎典子 (編) (2022). 『移動とことば 2』くろしお出版.
- ギデンズ, A. (2021). 『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』(秋吉美都, 安藤太郎, 筒井淳也, 訳) 筑摩書房. (Giddens, A. (1991). *Modernity and self-identity: Self and society in the late modern age*. Polity Press.)
- 小林聡子 (2021). 『国際移動の教育言語人類学——トランスナショナルな在米「日本人」高校生のアイデンティティ』明石書店.
- 佐藤浩一, 越智啓太, 下島裕美 (編) (2008). 『自伝的記憶の心理学』北大路書房.
- 信原幸弘 (2017). 『情動の哲学入門——価値・道徳・生きる意味』勁草書房.
- バーバ, H. K. (2012). 『文化の場所—ポストコロニアリズムの位相』(新装版; 本橋哲也, 正木恒夫, 外岡尚美, 阪元留美, 訳) 法政大学出版局. (Bhabha, H. K. (1994). *The location of culture*. Routledge.)
- 一青妙 (2012). 『私の箱子』講談社.
- 古沢嘉通 (2017). 編・訳者あとがき. リュウ, K. 『紙の動物園』(pp. 255-263) 早川書房.
- ミルズ, C. W. (2017). 『社会学的想像力』(伊奈正人, 中村好孝, 訳) 筑摩書房. (Mills, C. W. (1959). *The sociological imagination*. Oxford University Press.)
- リュウ, K. (2017). 『紙の動物園』(古沢嘉通, 訳) 早川書房. (Liu, K. (2015). *The paper menagerie and other stories*. Bloomsbury.)
- Agha, A. (2007). *Language and social relations*. Cambridge University Press.
- Bakhtin, M. M. (1981). *The dialogic imagination: Four essays*. University Texas Press.
- Block, D. (2007). *Second language identities*. Continuum.
- Blommaert, J. (2005). *Discourse: A critical introduction*. Cambridge University Press.
- Blommaert, J. (2007). Sociolinguistic scales. *Intercultural Pragmatics*, 4(1), 1-19. <https://doi.org/10.1515/IP.2007.001>
- Blommaert, J. (2010). *The sociolinguistics of globalization*. Cambridge University Press.
- Bourdieu, P. (1991). *Language and symbolic power*. Polity Press.
- Bucholtz, M. (1999). “Why be normal?": Language and identity practices in a community of nerd girls. *Language in Society*, 28(2), 203-223. <https://doi.org/10.1017/S0047404599002043>
- Bucholtz, M., & Hall, K. (2005). Identity and interaction: A sociocultural linguistic approach.

- Discourse Studies*, 7(4/5), 585-614. <https://escholarship.org/uc/item/5tk670n8>
- Butler, J. (1990). *Gender trouble: Feminism and the subversion of identity*. Routledge.
- Coupland, N. (2007). *Style: Language variation and identity*. Cambridge University Press.
- De Fina, A. (2016). Language practices and transnational identities. In S. Preece (Ed.), *The Routledge handbook of language and identity* (pp. 163-178). Routledge.
- De Fina, A., Schiffrin, D., & Bamberg, M. (Eds.) (2006). *Discourse and identity*. Cambridge University Press.
- Dong, J. (2011). *Discourse, identity, and China's internal migration: The long march to the city*. Multilingual Matters.
- Eckert, P. (1989). *Jocks and Burnouts: Social categories and identity in the high school*. Teachers College Press.
- Eckert, P., & McConnell-Ginet, S. (1992). Think practically and look locally: Language and gender as community-based practice. *Annual Review of Anthropology*, 21, 461-490. <https://doi.org/10.1146/annurev.an.21.100192.002333>
- Fogle, L. W. (2012). *Second language socialization and learner agency: Adoptive family talk*. Multilingual Matters.
- Fogle, L. W., & King, K. A. (2013). Child agency and language policy in transnational families. *Issues in Applied Linguistics*, 19, 1-25. <https://doi.org/10.5070/L4190005288>
- Foucault, M. (2003). *Abnormal: Lectures at the College De France 1974-75* (G. Burchell, Trans.). Verso (Original work published 1999).
- Gafaranga, J. (2010). Medium request: Talking language shift into being. *Language in Society*, 39(2), 241-270. <https://doi.org/10.1017/S0047404510000047>
- García, O., & Li Wei. (2014). *Translanguaging: Language, bilingualism and education*. Palgrave Macmillan Pivot.
- Goffman, E. (1963). *Stigma: Notes on the management of spoiled identity*. Prentice-Hall.
- Gumperz, J. J. (Ed.) (1982). *Language and social identity*. Cambridge University Press.
- Joseph, J. E. (2004). *Language and identity: National, ethnic, religious*. Palgrave Macmillan.
- Labov, W. (1972). *Sociolinguistic patterns*. University of Pennsylvania Press.
- Massey, D. (1999). *Power-geometries and the politics of space-time: Hettner lecture 1998*.

University of Heidelberg.

Massey, D. (2005). *For space*. Sage.

Norton, B. (2013). *Identity and language learning: Extending the conversation*. Multilingual Matters.

Norton-Peirce, B. (1995). Social identity, investment, and language learning. *TESOL Quarterly*, 29(1), 9-31. <https://doi.org/10.2307/3587803>

Pratt, M. L. (1991). Arts of the Contact Zone. *Profession*, 33-40. <http://www.jstor.org/stable/25595469>

Revis, M. (2019). A Bourdieusian perspective on child agency in family language policy. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 22(2), 177-191. <https://doi.org/10.1080/13670050.2016.1239691>

Silverstein, M. (2003). Indexical order and the dialectics of sociolinguistic life. *Language & Communication*, 23(3/4), 193-229. [https://doi.org/10.1016/S0271-5309\(03\)00013-2](https://doi.org/10.1016/S0271-5309(03)00013-2)

Tuominen, A. (1999). Who decides the home language? A look at multilingual families. *International Journal of the Sociology of Language*, 140, 59-76. <https://doi.org/10.1515/ijsl.1999.140.59>

Wertsch, J. V. (1993). *Voices of the mind*. Harvard University Press.